
ニヨニヨたんネギま入り

弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一〇二〇たんネギま入り

【NZコード】

N4029S

【作者名】

弥生

【あらすじ】

紀伊 陽炎、それは居合切りの達人であり、鍔の音がなる頃には既に切り終わっていることから、『鍔鳴り』という異名を持つている。彼は常に成長を求め、ありとあらゆる命を切り殺していくが…ある日、人切りでないものに敗北を喫する。なぜあの時自分は負けたのか…その後、餞別として貰った鍔とともに、彼は捜す…

- ・ そいつの強さの理由を。

この作品は私の処女作です。・・・たびたび変更して申し訳ありま

せんが、ここ最近練つていた構想は一ヨ二ヨたんでは使用できない
という結論に至り、キーワードも変更いたしました。

第1話　「『』たんじる？（前書き）

これは「魔法先生ネギま！」と、「史上最強の弟子ケンイチ」のキャラクター、紀伊陽炎のクロスオーバーです。ほか、性格崩壊などそういうのが苦手な人は・・・失礼ですが、やめたほうがいいでしょう。

第1話　「『』たんじる?」

日本のどこか・・・関東地方の森で、2mを越える長身の一人の男が、関西地方へむかつていた

ザクザクザクザクザクザクザクザクザクザクザクザクザク
ザクザクザクザクザクザクザクザク

いや、向かつていたというのは語弊がある。たまたま方向が関西へ向かつっていたというだけだ。その男は「刃金の眞実」と謳われた名もなき鍛冶師が鍛えたかなりの業物である・・・鍬をつかつて、一心不乱に地を耕していた。

あ、申し訳ないことにまた一つ間違えてしまった。この男は大地を耕しているのではなく、「居合い切つて」いるのだ。というのもこの男は、何かを切る事に生きがいを持ち、己の技術が進歩していくと信じ、何十年に渡り、ありとあらゆる生物の命を、愛刀『刹那丸』とともに切つてきた。

ザクザクザクザクザクザクザクザクザクザクザク
ザクザクザクザクザクザクザクザクザクザク

しかし、数週間前にある一人の女性の剣客に負けた。その人物との戦い、剣の速さは圧倒的に自分が上、しかし、『己と剣を一つにする』戦いで自分は負け・・・刹那丸を持っていかれてしまった。その後、彼は自分の庵で・・・己の頭の上に鳥が巣を作るようになつても考えた。何十年共に生き、数多くの命を刹那丸とともに殺してきた自分。それは剣技の進歩のためと考えてきた。だが、自分を下した女性は人切とは程遠い目をしていた。その女性が刹那丸を打った刀匠の子供であると気づいたのは、自分が負けた瞬間だ。

Γ | | π | | π | | π | | π ~~~~~ · · · · · · · ·

でも、それと同時にその女性はただの一人も命を切り殺した事は、どんな小さな命でもない事が感じ取れた。彼女と自分の違いは一体何なのか・・・彼はそれが知りたかった。

しかし、愛刀刹那丸を奪われてしまつてからというもの、自信が完全に失われてしまつた。同僚（？）らしき人たちが代わりの刀を提供してくれたが、自身の技に耐え切れなかつたり、自分とはフィーリング（彼にとつて一番大事なこと）が合わない物しかなかつた。その後、「名刀がある」と聞かされその場に向かうと、なんとあの女性の弟子と、本人が来ているではないか！その人物のところに向かうついでに名刀とやらを試してみた所、いい刀ではあるが自分とは合わなかつた。やはり自分には刹那丸が一番だ。

そんなわけで刹那丸の所在を聞いてみた。

「刹那丸は元氣にしますか！？」

「くしあつた。」

目の前が真っ暗になつた。ジョークと知つてちょっと安心したけど。
・・全然返してくれそうもない。あ、気が付けばさつきの坊やがピ
ンチ。このままじゃ真つ二つに・・え！あの坊やを助けたらあの
刀匠の業物を一つくれる！？これはもう引き受けるしかないなあ。

そして鎧の男と戦つていたが、自身が代用にもつっていた木刀が折れて意氣消沈。彼は武器がないと自信が出なくなり、一気に防戦一方になつた。その少年の機転で刀を所持して、敵を撃退する事に成功。約束通りに刀匠の業物を譲り受ける事になつた。それがさつきからザクザク言いまくつている鍬である。刹那丸より劣るが彼のフイーリングにすっごくしつくりきた様で、喜び勇んで大地を居合きりまくつているのだ。

「…」

・・・まあ本人は幸せそうである。刹那丸を奪われて以来、自分のフィーリングに合うものが全然見つからなかつた以上、仕方ないといえなくもなかろう。だが、まだ彼は答えを見つけていない。人切でない彼女の強さの秘密を・・・。大地を居合いきつている内に、気が付けば夜になつていた。

「あいや、ここは何処だによ？大地君（鍬の愛称）に夢中になつているうちにこんな所に・・・。」

彼は周囲を見渡してみるが、何処をみても森、森、森・・・完全に迷つてしまつたようだ。しかも辺りはすっかり夜になつていて、方角すら分からぬ。

「はあ、仕方ない。とりあえずご飯を探しに・・・ムホ、つばせり合いの音？音から考へると、3kmつてどこかによ？」

野生動物を狩に行こうとした矢先、どこからかつばぜり合いの音が聞こえた。なお、3km先の音など常人には聞き取れるはずもないが、『真の達人級^{マスタークラス}』と呼ばれる力テゴリにはいる彼には朝飯前のことなのだ。彼は右手に鍔を背負い、音の発信源に向かった。

「はあ・・・はあ・・・。」

「フム、その年にしてはなかなかやるようだな。（鳥族—つねく）
の少女よ」

「べつー。」

第1話　「『たん』たんじてるへ」（後書き）

はじめまして、弥生とこつものです。『たん』が好きすぎてこんなものを作ってしまいました。超亀更新が予想されますが、生温かい目で見てください。

「フム、今のうちに潔く降伏なさい。苦しまぬように殺してあげますよ?」

「う、煩い!まだ・・・やれる!」

「フム、頑固なお嬢さんだ。」

桜咲刹那（さくらざき せつな）、彼女は魔帆良学園の中等部、2年A組の生徒だが、警備員の仕事を請け負っている。

といつても、その相手は人間ではなく、もっぱら『化け物』が専門だ。この学園はその背景から、そういうた襲撃者が非常に多い。そのため、実力のある者...そして、『裏の世界』の存在を知る者がこの学園には多くいる。

彼女は、この学園に来て以来この手の輩の相手を数多くしており、その殆どがとるにならない奴等だった。だからどこかで油断していたのだるつ、「今回もそのうちの一つだ」と。

だが、今回の襲撃は実力者が多く、とくに『悪魔』と呼ばれる連の中でも結構な実力者がそろっている上に、その一体一体が戦力を分散させるための作戦をとつた。普段この様な作戦を取ることが無かつたため対策が間に合わず、諸にはまつてしまい、彼女は仲間と離れ離れになってしまった。

そして今、彼女は老紳士の姿を模した悪魔に追い詰められている。口調も服装も紳士そのものだが、どうやらじわじわとなぶり殺しにするのが趣味な様で、一瞬で彼女を葬れるだけの実力差があるので、それをせずに、彼女の腕、足を少しづつ削るようにつぶし、そしてついさつき、彼女の愛刀『夕凪』が弾き飛ばされた。

「フム、もう君に剣はないというのになぜやれると思うのかね？」
「フムフムフムフム煩いぞ…。私の武器が刀だけだと思ったら大間違いだ！」

「フウム、いい度胸だ。…丁度君で遊ぶのも飽きて来た所だ。そろそろ仕留めてあげよ。」

悪魔はそう言い放つと、両手に魔力をため、その魔力を円の形になるように広げていく。先ほどからこの悪魔達がやっている技だ。こうして魔力を壁にすることで、攻撃と防御の双璧をなしている。これには彼女の相棒である「龍宮真名」の精密射撃も通用せず、相手の体当たりに成すすべなく追いやられ、そして刹那は孤立してしまい、まもなく最期の時を迎えるとしている。

「（足も腕もろくに動かず、氣もろくに作れず…）口までか。「メンなこのちやん、何も言わずにいなくなつて…いや、ウチの様な『化け物』はやつてこいつなゐべきやつたんやろつた。」

刹那は自嘲してクスリと笑つた。悪魔はその様子を見て、自分は罠にはまつてしまつたのかと思い辺りを見渡すが、少女の仲間はおろか自分の同僚の気配すら感じられない。悪魔は、「どうやらこの女の嘲りはこんな所で死ぬ無様な自分自身に向けた物」、と判断した。悪魔がドンドン魔力を充実させていくのを見て、刹那は「もうすぐ死ぬな。」とだけ思つた。

ガサガサツ

「一三、いたいた。」

「え？」

「フム？」

生い茂る草木を押しのけてやつてきたのは、パツと見ても2mを越えているのが分かる背丈の、全身真っ黒な服をきた男だ。のっぺりそのもののような顔をして、背中には何故か鍬を背負つており、その手には夕凪が握られて…そこで刹那は我に返り、体の痛みを忘れて詰め寄った。

「あ、あの！私、桜咲刹那といいます！失礼ですが、その刀を何処で！？」

「何処つて…音が聞こえた方角へ歩いてたら落ちてたから拾つた。」「い、いきなりアレなんですが、それ私の刀なんで、返してくれませんか！？」

「私の刀つて…駄目でしょう、手放したりしたら？」

人差し指を突き出して「メツ」と刹那を軽く叱る。彼は顔がすごく大きく、ぺたりとしているため、それだけでも刹那は十分怖かつた。

「フム…で、アンタはいつたい何者だ？」

今気がついたのか男は悪魔の方へ顔を向け、無くなつたはずの夕凪が目の前に来たことに喜んでいた刹那はバツと意識を悪魔に戻した。

「ああ、私ですか？私の名は・・・」

それは、世界で只一人・・・『己の身体能力』だけで、魔力や氣を使ひことなく・・・

「『鶴鳴り』のあざなをもつ・・・」

いや、使つてもまづたどり着くことはできない、『音速越えの居合
い切り』。

「紀伊 陽炎 と申します。以後お見知りおきを・・・。」

その男は、この世界で旋風を巻き起こし、…名も無き刀匠の娘の強
さを知る事になるのを、誰一人とて知る由もなかつた。

「オマケ」

「フム、で、その鍬はなんなんだ？」

「大地君です。プリチーでしょ？」

「ふ、ふりちー？」

・・・思つはずも無かつた。

「『』たゞ」探検（後書き）

やはり小説って書くの難しいですね。
所で、書いてる途中に思いついたのを番外編として出すのはありますか？

第3話　「『』たとへんの『』」（前編）

一言『ケンイチ』世界における『』は、『ネギまー』世界における『』と違つものですね。

第3話 二三一三たんはじめての『氣』

「フム、邪魔が入ったが、覚悟は良いかねお嬢さん？」

悪魔は相も変わらず魔力を充填している……いや、もう既に完了している状態だ。たとえ刹那が万全な状態でも、この状態で来られたら一たまりもあるまい。

「ね～、あの光ってるのってなんだ二三？」

「あれは、アイツが集めた魔力で自身の体をまとってるんです。ああする事で、攻撃と防御を同時に為しているんです。」

「へ～。」

なにを呑気なことを、と刹那は大男に怒鳴りつと振り返るが、その目は初めて魔法を見た人間と同じもの……つまり『この男は戦い慣れした人間ではない』、と刹那は判断した。

「（この人は紛れ込んでしまつただけか。助つ人かと思つたが…いや、それは高望みしすぎか。となると…予定どうり私がやるしかないか！）陽炎さん、夕凪を！」

実際は身の程知らずにもほどがある結論だが、彼女は幼少時から剣をとり戦い続けた自負があり、それは彼女の自信と過信につながる。この一つは裏と表の関係にあるから、どちらか片方を都合よく、というわけにはいかないのだ。・・・まあ鎌を背負う男が歴戦の戦士だと思うはずもなかろうが。

「夕凪つて…これのこと？」

「そうです！あなたは下がつていってください…」
「下がる？..」

陽炎の眉がピクッと揺れる。さすがにたかが十数歳の小娘に心配されるほど落ちぶれてはい…どころか、彼は現役真つただ中だ。齡にして50に届こうとしているとはいえ、目の前にいる『こんなのに』負ける要素は何一つとしてないのだ。

「早く！あいつがまだ余裕を見せている内に・・・」

「あのね・・・ん？」

刹那の相変わらずの上から目線に苛ついていたが、その気配が突如サッパリ霧散した。それは、刹那の手が光っていることに気づいたからだ。

「その光つてるのは？」

「これは『氣』といって、人間の生命エネルギーを媒介にする事で生まれるものです。私はその力を使う事が出来ますので、心配は要りません、あいつの相手は私に任せください。」

刹那は陽炎に向かつて、笑いながら説明する。笑いながら説明する事によつて、説明する相手に安心感を持たせる効果があるのだが、

生憎この男に対しては只の空回りである。

「陽炎さん、早く夕凪を…刺し違えてでも奴は私が…・…っ…？」

刹那が自信の全てをかけようとする中、陽炎は刹那の言った『生命エネルギー』について考えている。彼ぐらいの達人になると『 気 』という言葉は切つても切れない関係にあるが、『 媒介にして生まれる』なんて聞いたこともない。

「（いつもするみたいに、気組みをしてみよ。）」

『オオツ・・・

ポウツ・・・

「おお、光った！」

「・・・つー? そんな馬鹿な!」

刹那は、いつまでもつまらない意地をはつてないで夕凪を返してもらおうと、意識はあくまで悪魔の方に向けながら、首を軽く陽炎の方へ向ける。するとなんと、気の事を全然知らなかつた筈の男が、僅かながらだが『氣』を発しているではないか！

その事に仰天して、全意識を陽炎の方に向けてしまう。それなりに経験のある戦士にあるまじき失態だが、彼女の素性を知る者は「アイツだしな」という感想がでてくるだろう（それでいい筈がないが）。

というのも、『氣』というのは、先に記したように生命エネルギーを燃やす事で発せられるモノ。それは発するだけでも、長い肉体的修練と、精神的修練を必要とする。修練の環境しだいによって大なり小なり差があるが、それでも一朝一夕に身に付けられるものではない。だが、目の前の男は一瞬で成し遂げてしまった。その瞬間、彼女の中に、一瞬だが“嫉妬”が生まれてしまったのだ。

そんな大きな隙を、悪魔が見逃すわけも無く

「つー（マズイー）」

「こゝに来て刹那はよつやく口の上でかした失態に気がつくが、悪魔と刹那の距離はそう遠くない。すなわち、…もう二度にもならないのだ。刹那にできるのは、両腕を交差させて衝撃に備えるのみ。

「成る程、

こうするのか。

」

チ

ン

「・・・？」

刹那は悪魔が起こす衝撃に耐えるべくそのままの姿勢でいたが、唾がなる音が聞こえてから、悪魔の声さえ聞こえない。恐る恐る目を開けると、そこには

「なつー!?」

全身をバラバラにされて、肉塊となつた悪魔。そして自分の後ろで陽炎は悠然とたたずみ、夕凪についた汚れをふき取つている。

「な、何故だ？あなたはつこうつき『氣』が使えるようになつたば

かりの筈・・・。『

刹那は目の前の状況が信じられず、陽炎に唇を震わしながら、辛うじて出せた疑問を問い合わせる。

「ん~?『コレ』を刀に纏わせた事?^氣簡単だつたよ。刀を自分の一部にするのは何時もやつてゐました。」

それなりに経験を積んだ剣士であれば、自分の『愛刀』を“自分の一部にする”のはたやすい事。いつでも離さずともにあり、刀身の長さ、握り心地、空気を切る感触、その全てを知つてているのだから。だが、夕凪は紛れも無く刹那が所持する刀だ。上記のいずれも、知るのは自分…他には『長』以外には絶対に誰もいない。それが、今日初めて『氣』を覚えた人間なら、なおさらだ。

「あなたは、一体何者なんだ・・・?』

「何者が、と聞かれてもね、それじゃ応えようは無いかな。』

第3話　「アーマーたんはじめの『氣』（後書き）

と、言つわけで、やや消化不良な感じがしますが、一先ずここで一区切り。実は、この後高音組+オリキャラを救助するシナリオを作つたのですが・・・超ざわざになりそうなので没になりました。

zz 次は学園長室から始まります。

なお、ケンイチ世界の『氣』は「呼吸や気配などの第六感からなる精神的干渉」であるのに対し、ネギマーに置ける『氣』は「生命エネルギーを直接物質エネルギーに変換する方法の総称」と捉えております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4029s/>

ニヨニヨたんネギま入り

2011年10月7日23時02分発行